印旛沼のチュウヒとハイイロチュウヒの生息状況

箕輪義隆・桑原和之・〇浅川裕之（千葉市野鳥の会）・奴賀俊光（千葉大・バイオ）・小田島高之（千葉県立中央博物館）

湖沼やそれに隣接したヨシ原などの湿地は、湖沼で普通に見られた。1980 年代以降、国内の湿地は急激に減少している。湿地の減少とともに、水辺で生活する種の個体数も減少し、それに伴い、保護に対する関心が高まってきた。湿地で生活するチュウヒやハイイロチュウヒは、千葉県内では、東京湾岸の湿地で普通に越冬し、繁殖例もあった。本種は、東京湾岸から姿を消し、千葉県各地で激減した。まだ、印旛沼では個体数は減ったといわれているが、チュウヒ類は毎年記録されている。著者らは印旛沼および調整地に隣接した湿地や水田で、1980 年代から鳥類の調査を行っている。現地で行った 2003-2004 年のチュウヒ類に関する観察結果をまとめ報告したい。

千葉県立印旛手賀自然公園の印旛沼北部を調査地とした。調査範囲は、印旛沼北部調整地、甚兵衛広沼およびその水田地帯を含む周辺である。印旛沼北部調整地とその周辺部、および甚兵衛広沼の 3 地域に分けた。調査地では、2003 年から 2004 年までの個体数の調査を行った。印旛沼北部調整地および甚兵衛広沼の周辺部の調査地では、重複して個体数を数えないように自動車を用い個体数を計数した。見落としがないように時速 10 ㎞以下で低速走行し、本種の個体数を全て数えた。8 倍から 10 倍の双眼鏡と 20 倍から 45 倍の望遠鏡を用いて行った。印旛沼北部調整地および甚兵衛広沼の水面では、定点から全ての個体数を数えた。また、夕方、塒での個体数の調査を行った。

印旛沼北部調整地と甚兵衛広沼およびその水田地帯を含む周辺では、甚兵衛広沼で塒が確認されたため、個体数が最も多く 26 羽が確認された。印旛沼北部調整地でも水面で 14 羽、周辺では 15 羽が記録された。ハイイロチュウヒも周辺の水田で塒が確認された。水田の塒では最大 5 羽が記録された。印旛沼北部調整地では、塒は確認されなかったが、甚兵衛広沼では、塒が確認された。2003 年１0 月 29 日に 11 羽を確認した。2003 年１2 月 7 日に 25 羽になり、2004 年１月 11 日に、甚兵衛広沼の塒では個体数が最も多くなり、26 羽を確認した。１月 11 日は、16:35 頃に、ヨシ上空を 9 羽が飛翔していたが、40 分には、11 羽に増加した。50 分には、水面近くに 4 羽が休息し、ヨシ原上空に 22 羽が旋回していた。その後、上空を飛翔する個体は減少し、水面にいた個体も 17:09 には塒に入ったため、見られなくなった。2 月以降個体数は減少し、４月 7 日には 5 羽になり、5 月 2 日には 1 羽も記録されなかった。2004 年の繁殖期には、甚兵衛広沼で 2 羽のチュウヒが確認されたが、営巣は確認されなかった。9 月 20 日には、まだ塒は形成されていなかった。

チュウヒは湿地に広く分散し、日中小動物を採食する。日中は、餌を探し捕らえ、捕食し、夕方、塒を形成する。したがって、チュウヒが記録される地域では、塒がとられているはずである。調査地以外から、千葉県内の湿地に生活するチュウヒの塒の報告例はない。20 羽以上が報告されている地域はない。調査地で確認された塒は、1980 年代に確認されてから、現在まで継続されている。極めて貴重な地域といえる。調整池の護岸からのヨシが、最も広がる地域が、この塒が形成されている地域にあたる。この地域に、人工物が増設されると塒が消失すると予想される。また、湿地の営巣環境は、年により大きく変動する。繁殖の有無は、単年度で結論をだすのではなく、数年のモニタリングが必要であろう。